第56弾

怖い話のおもひで。

M「さ!おまちかねのホラー特集です!怖い話大スキーーっっ♪特集2年ぶり」
F「…待ってないいいい」
M「もぉーFさんはどうしてこんなに怖がりなのかしら。Tちゃんは?怖いの好き?」
T「…好きではないですけど…最後まで読んだらホラーだったってことはあります」
M「ホラーって気づかなかったの!?」
F「それはある意味無敵なのでは」
M「怖さに気づいてもらえなくて作家も悲しいわねー。ところで最近のホラー作品は『モキュメンタリ―』っていうのが流行ってるんですってよ」
T「もきゅ・・・???」
M「うん、Tちゃんハムスターみたいで可愛いけどそうではない。偽物を表すモックとドキュメンタリーを合わせた造語ですって。本当にあった話かのように書かれたフィクションってことかな。今話題の『近畿地方のある場所について』とかがそうみたい。そういや『残穢』もそうかも。著者の小野不由美の体験談のように書かれてたよね?」
F「…えっと怖そうで読んでいないのでワカリマセン」
M「映画も観てないの?」
F「映像なんてもっと怖いじゃないですかぁ!(泣)」
M「映像は視覚や音で比較的簡単に怖がらすことができるよね。その点、小説の怖さったら、すべて読み手に想像させることで恐怖を与えるからね!子どもの頃から読めばリアルな想像力が育つってもんよ!」
F「・・・想像力が育つかはさておき、子どもって怖いお話大好きですよね」
T「水木しげるの本とか、怪談絵本とか人気です」
M「水木しげるの絵は子どもには結構怖いよね。アニメだって今みたいな可愛い感じじゃなかったよ。子どもの頃、『ゲ●ゲの鬼太郎』のアニメ見るの怖かったな~」
F「あれ?子どもの頃から怖い話が好きなのでは?」
M「・・・いやいや、子どもの頃は心霊写真の本とか見て夜寝るの怖かったりしたよ?
うーん…いつから怖い話が平気になったのだろうか。セピア色の記憶を紐解かねば」
T「(…セピア色じゃなくてもう白黒では)」
M「Tちゃん、今何か思ったでしょ」
T「ひぃ」
F「恐ろしいものはお化けだけではないですねぇ」
M「そうそう。いるかどうかわからんモノなんて怖くない!」

←QRコードでもアクセスできます

インスタグラム公開中　ここにアクセスしてね★
https://www.instagram.com/hondarake55

Volume.63
YA通信

ほんだらけ

2024.8.1

おわかりいただけただろうか

M「怖い話大好きです!」
F「怖い話大嫌いです!」
T「コワクナーイ、コワクナーイ(おまじない)」

『怪談短歌入門 怖いお話、うたいましょう』

東直子　佐藤弓生　石川美南/著　メディアファクトリー　2013年刊

911.1/ヒガ

怪談短歌コンテスト(!)の第1回、第2回の入賞作がたっぷり掲載されている、怖さ満点の短歌の本です。3人の選者それぞれが選んだ優秀作はもちろん佳作だってかなりのものです。たった31文字で怖さを引き出すためにはどうしたらいいか?・・・そう、読む相手にいかに想像させるかということです。怖い本は小説や心霊の本だけじゃないんですよ。31文字の中に広がる異界に迷い込んだのは誰でしょう?あなたが一番怖かったのはどの歌ですか?

ホンダラケとは

本誌は、読者の身も心も「本だらけ」にしてやろうという心意気から生まれた中高生向け小冊子です。本誌に登場する本は全て三田市立図書館本館のYA(ヤングアダルト)コーナーでご覧いただけます。
2か月に1度、年6回発行予定です。
ホンダラケは皆様の投稿をお待ちしております。YAコーナーに用紙・ポストがございますので、おすすめ本や本誌の感想・要望などお寄せ下さい。

青春読書記

～三田学園図書委員会より愛をこめて～

テーマは「星」
星をつないでつないで、さてどんな物語が見えてくるかしら～♪

『汝、星のごとく』 凪良ゆう／著　講談社　2022年刊

この本は、風光明媚な瀬戸内の島に育った高校生の暁海と、母の自由すぎる恋愛に振り回され、島に転校してきた櫂が主人公の物語です。毎日心に孤独と欠落を感じている二人は、惹かれ合い、すれ違い、成長していきます。2023年の本屋大賞第1位受賞作品となった愛の小説です。読む人に、悲しさと優しさを与えます。ぜひ、読んでみてください。

F/ナギ

P.N.　TERU（中学１年生）

「こんな本、棚から見つけました」のコーナー

このコーナーでは、スタッフが棚を見て“再発見”をした本を紹介します

『スマホアプリはなぜ無料？ 10代からのマーケティング入門』

松本健太郎／著
河出書房新社
2023年刊

675/23

言われてみれば、筆記用具やお菓子などとは違ってスマホアプリは無料で使えるものが多いですよね。どうしてそんなことができるのでしょう？
この本ではその疑問にこたえるところからはじまり、ビジネスの仕組みやマーケティングについて教えてくれます。数字が苦手な人でも大丈夫。お金が動く仕組みは「人がどう感じるか」が鍵だからです。この本で得られる知識は、社会の中で生きていくあなたの力にきっとなってくれます。

新着図書 Pick Up

『学校に行かない僕の学校』 尾崎英子／著　ポプラ社　2024年刊

F/オザ

中学2年生の薫は、不登校になってから「東京村ツリースクール」というフリースクールで寮生活をすることに。フリースクールとは不登校の子供たちに学習活動などを行っている民間の施設のこと。この本は、彼がそこで過ごした日々を書いた物語です。
自然にかこまれ、それぞれに事情を抱えた寮生たちと交流をしていくことで、薫は過去と向き合って進んでいく勇気を持つようになります。
自分らしくいられる場所や友達との出会いは人生を豊かにしてくれるものだと教えてくれる一冊です。

難しいと思われているけれど、実は面白い名作があるから読んでみてほしいんです。

『ジーキル博士とハイド氏』

スティーヴンスン／著　海保眞夫／訳　岩波書店　2002年刊

名の知れた博士、ヘンリー・ジーキルと、恐ろしい事件の犯人、エドワード・ハイド。このふたり、秘薬によって姿は違うものの、実は同一人物なのです。そんな事情を知るはずもないジーキル博士の友人、アタスン弁護士はハイド氏の正体を探り、たどりついた真実に戦慄します。自分の評判や心に生まれる衝動に気を病み、欲望に心を許してしまった人物の末路を描いた作品です。
この物語に描かれている人の二面性には底知れない怖さを感じます。

933/ステ